

京都大学	博士 (医学)	氏名	愛須奈央
論文題目	Effectiveness of Reduced-fluence Photodynamic Therapy for Chronic Central Serous Chorioretinopathy: A Propensity Score Analysis (慢性中心性漿液性網脈絡膜症に対する低線量光線力学療法の有効性: 傾向スコア解析)		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本研究は慢性中心性漿液性網脈絡膜症 (cCSC) に対する低線量光線力学療法 (rf-PDT) の2年間の有効性を検討した後ろ向きコホート研究である。</p> <p>2007年5月17日から2018年11月15日の期間に京都大学医学部附属病院を受診したcCSC患者223例のうち、初診時に黄斑部に活動性の漿液性網膜剥離 (SRD) を有し、無治療経過観察あるいはrf-PDTが行われ、2年以上その他の介入がなく経過を追えた者を対象とした。初診時に脈絡膜新生血管が疑われた症例、及び、網膜光凝固・抗VEGF療法・光線力学療法ならびに白内障手術以外の内眼手術の既往がある症例は除外した。治療前視力を含む18項目の背景因子から算出した傾向スコアを算出し、逆確率重み付け (IPTW) 法により患者背景を調整した上で、2年後の視力維持率 (24ヵ月後の矯正視力がベースラインの視力と同じか改善した患者の割合) およびSRDの消失率について比較検討した。</p> <p>合計155眼 (rf-PDT群: 74眼、対照群: 81眼) が解析された。IPTW後の両群間における患者背景因子の標準化差は全て0.1未満で、背景因子は良好に調整された。</p> <p>2年後の視力維持率はrf-PDT群で対照群より有意に高かった (93.6% vs. 70.9%、$P < 0.001$、12ヵ月; 85.7% vs. 69.8%、$P = 0.019$、24ヵ月)。rf-PDT群はより良好な視力改善を示す傾向は認められたが、統計学的に有意ではなかった (-0.06 vs. -0.008、$P = 0.07$、12ヵ月; -0.06 vs. -0.03、$P = 0.32$、24ヵ月)。SRDの完全寛解率はrf-PDT群で有意に高かった (ハザード比、5.05; 95%信頼区間、3.24-7.89; $P < 0.001$)。</p> <p>cCSCに対するrf-PDTは、視力維持とSRD完全寛解の両方において有益な効果があることを示唆している。本研究はcCSCに対するrf-PDTの有効性について、未治療の対照群との2年経過を比較した唯一の研究である。傾向スコア解析を効果的に適用することにより、治療群と対照群の間の背景因子の不均衡を大きく低減し、公正な比較をすることに成功した。今回の結果は、cCSC患者に対するrf-PDTの使用を支持するものである。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

本研究は慢性中心性漿液性網脈絡膜症(cCSC)に対する低線量光線力学療法(rf-PDT)の有効性を検討した後ろ向きコホート研究である。

cCSCは働き盛りの男性に好発し、視機能に重大な影響を与える疾患である。rf-PDTが有効というコンセンサスはあるものの、現在は適応外使用で治療へのアクセスが限定されている。cCSCに対するrf-PDTが薬事承認を得て幅広く行われるには、エビデンスレベルの高い研究が必要である。

cCSC患者のうち、初診時に黄斑部に活動性の漿液性網膜剥離を有し、無治療経過観察あるいはrf-PDTが行われ、2年以上経過を追えた者を対象とした。治療前視力を含む18項目の背景因子から傾向スコアを算出し、逆確率重み付け法で患者背景を調整した上で、2年後の視力維持率および漿液性網膜剥離の消失率について比較検討した。合計155眼 (rf-PDT群: 74眼、対照群: 81眼) が解析された。2年後の視力維持率はrf-PDT群で有意に高く (85.7% vs. 69.8%、 $P = 0.019$)、漿液性網膜剥離消失率もrf-PDT群で有意に高かった (ハザード比、5.05; 95%信頼区間、3.24-7.89; $P < 0.001$)。以上から、rf-PDTがcCSCの視力維持と漿液性網膜剥離消失に有益であることを示した。

本研究は治療群と非治療群を長期比較した初めての研究であり、傾向スコア解析を有効に用いることでこれまでのエビデンスを補完した。さらに、cCSCに対するrf-PDTの医師主導治験のプロトコル作成等にも寄与した。

以上の研究はcCSCにおけるrf-PDTの有効性の解明に貢献し今後の治療適応拡大に寄与するところが多い。

したがって、本論文は博士 (医学) の学位論文として価値あるものと認める。

なお、本学位授与申請者は、令和5年12月11日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。

要旨公開可能日: 年 月 日以降